

【講演】

子育て支援と地域との協同

新澤誠治（東京家政大学教授）

ワーカーズコープには大変、興味と共に共感、親しみを感じていました。今日はこうしてみなさんと話ができる機会を得て嬉しいなと思っております。実はつい最近、4日間検査、治療のための入院をして退院したばかりで元気があまり出ないですけど、今日は「やるぞ」と張り切ってきたので、どうぞ聞いてください。



●保育園事始め

～戦後の荒廃と児童福祉～

■子どもとの出会い

戦後がまだ残る頃、1995年に「スラムの子どもをキャンプに！」という誘いを受けて、参加し、貧しい中で生活する子どもたちに出会い、東京の「底辺地帯」「日雇いの基地」と呼ばれていた「高橋ドヤ街」にまだ学生時であった私はボランティアとして通いました。

それを契機として保育所の仕事に入りました。はじめは保育園の用務員のようなもの

で、当時は体重が48kgとやせ細った身体でまことに頼りない状態でしたが、紙芝居を持って町に出かけ、昼は保育の手伝い夜は学習会、子ども会などをして過ごしました。

高橋地域はドヤ街といわれて、周りの地域から嫌われ、ひとつの島をなしていました。そこに行った私は、「どうせ長続きしないだろ」「逃げ出すに違いない」と地域からも、ともに働く人からも見られていました。

こうして開拓時代を過ごし、無認可保育園を認可保育園にし、障害児保育を始めて、地域全体で取り組むまでにし、乳児、延長保

育、開かれた保育園、「子育てひろばとしての子育て支援センター」とうたい、園を変えるとともに、公設民営の子ども家庭支援センター、通称「みずべ」を立ち上げました。

私は本当に体が弱く、息子からは「お父さんは駄目だ、駄目だ」といって30年を生きてきたね」と言われるように、入院したり、寝込んだりして、今日まできました。全国の友人からは「新澤さんは死んだ」とかいう噂が流れたり、もう再起不能などと思われたりしてきました。

■私を生かしたもの

こんな私が、寝込みながらずっと考えていたのですが、こんな風にして「入院だ」とか「もう駄目だ」という中でよく仕事してきたなという思いがします。それは能力がものすごくあってとか、行動力があってとか、頭が冴えているとか言うことではない。何がそうさせてきたのだろうと考えてきました。

それははじめて貧しさの中に生きる子どもたちと出会い、痛みや、社会の不合理的に怒ったりして、「子どもに最善の環境を」「この子、この親のパートナーとなっていこう」と決意したり、共生社会をこの地域に築くのだというようなミッションを持っていたからだと思います。

■事業の根幹にミッション・ビジョンを！

「保育」とか、「子育て支援」とか、「NPO活動」は、このミッションで成り立っているのだと思います。子育て、子育てに関するNPOの事業は決して運営は楽でなく、働く人の処遇もけっしていいとは思いません。

仕事自身も苦勞が多く日常的に大変だと思います。それでは仕事をやっていく中で何が支えかといえ、ば、「ミッション」だと思います。「ミッションは何か」と言ったならば、使命や理念などいろいろありますけれども、私は「心意気」だと思います。「この子ども達にこういう体験をさせたい」とか、「こんなことを大切にこういうことをしてみたい」とか、「こういう施設や地域をつかっていきたい」とか、こういう心意気が私達を動かしているのだと思います。現場は大変なので、この心意気・ミッションがないとつぶれてしまいます。

もうひとつくわえると、ビジョンだと思います。今は夢が持ちにくい社会だと思います。その中で私たちは、子育て、子育てにかけるビジョン、ロマンだと思うのです。

私は若いときはよく街の中を歩き、街角に立って紙芝居を見せたり、子どもたちと石蹴り、鬼ごっこ、缶けり、りんご箱を出しての勉強などをしていました。

ある日、紙芝居を持って歩いていると、老人が「ちょっとちょっと」と呼ばれたんですよ。なんだろうと立ち止まると、「あなたの目はいきいきしていますね」と言われたのです。今のあの当時は「目を輝せて働いていたのだな」と思いました。

その当時大卒の初任給が大体18,000円くらいで、それに比して私の初任給は3,000円だったんですね。物は何も買えませんでした。毎日コッペパンを食べているような中で、お金がなくて貧しくても、自分の中で保育に対する思いがいっぱいあって、「こんな保育園つくりたい」とか、「こんな子どもたちに育てたい」とか、そんな夢が溢れるほど

あったような気がします。

保育とか子育て支援というのは、連日厳しくて日常に埋没していくと大変な仕事です。親子の姿にどうしたらよいかと迷ったり、保育者として自分自身に自信を失うとか、自己否定の気持ちになることもあります。

そうした中で自分を支えるのはミッション、ビジョンだと思います。つまり、勇気を持って立ち直る、そんな繰り返しの中で、保育者として成就し、事業が活性化し、保育所、子育て支援センターが本物になっていくのだと思っているんです。

■賀川豊彦（1888年～1960年）との出会い

この仕事に入った動機のひとつにはキリスト教の指導者であり、生活協同組合の創始者である賀川豊彦という人との出会いです。明治時代のことですが、賀川先生は神戸葺合新川という関西では有名なスラム街に入り、そこで起居して、伝道とさまざまな福祉活動をしました。

9年間そこに住みその記録が『死線を超えて』という本になりまして、これが当時のベストセラーになり、社会的にも知られ、その後、労働運動、生協の創始、農民運動をし、多くの社会福祉施設をつくりました。

私が園長を務めた神愛保育園を創始した先生でもあります。私は賀川先生に直接の指導を受け、信仰の深さ、人間としての温かさを肌で感じてきました。

■賀川豊彦とセツルメント思想

賀川豊彦は「セツルメント」という考えを持っていました。「セツルメント」というのはどういうことかということ、イギリスにイーストエンドに都市の底辺地帯というスラム街があり、そこに大学の学生達がセツルメント活動をします。

そのセツルメントとは地域に定住・仮住をし、地域の人福祉活動をするということです。その地域に住み込むか、通っていても心は地域に根を生やし、共に生きていく。共に働くということです。

同時に「分かち合う」という考えがあり、「何か教える・してあげる」ではなくて、例えば自分も学問をわかちあう、芸術をわかちあう、自分の持っている技術をわかちあう、自分の持っている経験をわかち合う、こういう思想です。

このセツルメント思想は私の保育園、子育て支援センター活動と続けてきた根底にあるものです。「住み込む」ということをもう少し考えたいと思います。保育園、児童館などに勤めると、「その施設の職員」ということで収まっていきます。

すると別に地域から施設に通う、決められた時間内だけは施設職員で仕事が終わると、地域のことには関係しないわけですね。しかし子ども達や親たちは、そこで生活しています。そうすると、時間を切り売りして「この時間だけこの施設にいる」ということではなくて、たとえそこに住んでいなくても、心をそこに置いて地域の人と親しくなる。そんなことがすごく大切で、地域に住んでいる人、働く人と協働しながら生きていくってことがとても大事だと思うわけです。

■共生の原理

賀川豊彦の思想の中に「相互扶助」というのがあります。「セツルメント」もそうですけど、お互いに「支えあう」、「育ち合う」、「助け合う」ということですね。今の社会は競争社会で、競争の原理、市場の原理で動いていると思います。一人一人が「自分」という形で動いていて、そういう人間が金で物事を解決していくとか、契約で「預かる、預ける」という関係が成り立つような社会になりつつあります。

地域も各家庭が孤立化し、それぞれが家の扉を硬く閉じ、自分の家族を守り、大切にしている、このことは大切ですが、近隣の間、互いが助け合う、支えあう、協力しあう関係が希薄になっていきます。

私達がつくろうとしているのは「協同社会」だと思うんですね。私はずっと「共に育つ」とか「共に生きる」とか「共に育ちあう」というものを自分の中に持ってきました。

●地域の自覚と生活の共有・共助

■保育園も「向こう三軒両隣り」

賀川豊彦は保育も「地域の中の向こう三軒両隣りの一つだ」という考えでした。つまり保育園も生活している。「隣近所と仲良くして、たまたまそこで子どもを預かっているだけなんだ」という考えですね。先生は施設という言葉は大変嫌い、鉄筋コンクリートは嫌い、「施設体」というのは、人をはねつけ、「何かしてあげる」という感じになる。これではいけないと考えていたのです。

「木造で平屋建て、扉に鍵をかけない」が原則だったんです。園長のときはこの教えを守り、40年間ずっと鍵をかけませんでしたが、おかげで何回か見事に泥棒に入られました。

賀川豊彦は「社会福祉は人格交流運動だ」と言うんですよ。運動体、つまり人と人のつながりの中で、分かち合う活動だということです。人と人が交わること、親切にし、悩みを分かち合うことを基本とされたのです。

保育園も騒音も出すしゴミも出す。いい事やっているということだけではなくて、生活体なんですよ。だからお互いが隣近所同士で助け合うっていう関係で成り立ってくるんだということを基本的に考えています。これを、生活を共有し、生活を共感し合っているということです。

私はこれを小さな地域と名づけています。

■生まれたときに知らせる

私が園長になってずっと願っていたことがあります、地域の人が「子どもが生まれたら保育園に知らせる」ということです。できたら「名付け親になって欲しい」と地域の人に言って欲しかったんです。

沖縄に何回も行っているんですけども、沖縄では園長室に保育園が名づけ親をした赤ちゃんの名前を書いた赤い札が10何枚か張ってあるんですよ。うらやましかったですね。私のところにも1人くらい、「名付け親になってほしい」と言ってきてくれないかなと願っているのですが、40年間に1人もきてくれませんでした。それだけ保育園は親しまれていないんですよ。子どもが生

まれたら知らせてくれる、時には名付け親になってほしいとくる、地域にどっしりと根を下ろした園になりたいですね。

私のところの保育園では月1回防災訓練があります。避難訓練で「リーン」って非常ベルを鳴らして、子どもたちが避難をしますよね。初めて非常ベルを設置して鳴らした時に、近所の人々が「どうした、どうした」とみんな来たんです。「いや予行練習です」と言ったら、怒られましたね。「予行練習をやるんだったらちゃんと前もって教えてくれ」と言われました。近くの米屋のおじさんが、「園長、俺達がすぐに飛んでいくから、先生方は消火はやらなくていいよ。子どもの安全を守って逃げろ。俺達がみんな消すから」といい、「玄関のところにひとつ消火器を置いておくように」と指示していきました。それから防災訓練のときには「これから火災訓練します」と隣近所24軒に知らせて歩いたんですよ。これが地域だと思うんです。その時に地域の人に「先生ね、もっと俺たちに頼りなよ。もっと相談しなよ」と言われたんですよ。このことがその後も教訓になりました。

■保育園も生活体

それから、こういうことがありました。ごみを捨てる場所がちょうど避難訓練場所だったので、町会長のところへ行きました、「ここにゴミ捨て場があると避難訓練するときにできないから、場所を変えて欲しい」とお願いしました。すると町会長が「わかりました」と言いました。「でも園長さん覚えておいてくださいね。先生のところも騒音をだす。夏には電話の話し声もきこえないの

ですよ」、「子どもが石を投げて、家のものが何度も壊されたんですよ。ですから、私達も保育園側の要望を聞きますけど、先生方も迷惑かけることがあるのですから、そのことも忘れないでください」といわれました。

それから私はお茶会というものを開きました。お茶会でみんなを呼んで、園でやろうとしていることを理解してもらう。これは良かったですよ。騒音というのは、お互いが理解し合っていると、騒音じゃなくなるんですね。子どもの声がとてもひいきした声に変わってくるのです。

こういうこともありました。下町ですから、立正佼成会がとても盛んなところですよ。ちょうど裏の家が立正佼成会の幹部の家でした。神愛保育園はキリスト教ですよ。賛美歌を毎朝歌うのですが、するとその家から必ずドンドコドンドコと太鼓をたたき、祈りを唱える声が高くなります。困ったなあと思ってね。うちの職員に相談すると、「先生、こうしましょう。今度、運動会のときに招待しましょう」というんですよ。それで招待状を持って、「どうぞ、運動会に見にきてください」といったら、ちゃんとゴザを持って見にきたんですよ。一日居てくれました。それからは「いただきものだから」とお土産を持っていったり、クリスマス会にときに招待しました。これは宗派が違うから無理と思ったのですがおじいちゃんとおばあちゃんが来てくれたんですよ。そうして賛美歌を歌うとドンドコはなくなりました。この経験というのは、私にとってとつても役に立ちました。

■甘えの精神

私は困ったときには父母の会、近隣、地域の人に相談に行きます。「みずべ」を開いたときに、駐輪場が必要になってきました。困って民生委員・主任児童委員の人のところへ行き「すいません、駐輪場がなくて困っています」と相談しました。すると民生委員の人が駆け回って町会の一部の空き地を了解を得たからと提供してもらえたのです。こういうことをだんだん心得ていって、何かあるとすぐに相談するようにしていきました。例えばあまり物が豊富でなくなっている。ひな祭りとか、5月のこいのぼりを買わなくても近所の人に「ひな人形ありませんか？」と聞くと、結構あるんですよ。みんな押し入れの奥にしまっているんですよ。それで持ってきてくれるときに、ちゃんとひし餅とかひなあられとかを一緒に持ってきてくれます。

そういうことを、「甘える精神」「頼る精神」と言っています。こういうふうにして地域の人たちと一緒にやっていくということが大事です。つまり地域というのは私達が何かをする対象ではなくて、お互いが共に協同の場としての地域ということですよ。ですから、助けたり助けられたりというような感じにすることで、地域の人たちが参加してくれる、自分達の働きを理解してくれる機会になると思います。

●保育園と児童館をあらためる

■胎児から社会に育つまで

これは乱暴な話ですが保育園から一時、

児童館と名称を変更しました。当時、無認可保育園でしたので簡単にできました。何故「児童館」ということにしたのかというと、当時児童館の総合的な働きということを考えていました。一つは「子どもを赤ちゃんから中学生としてとらえる」ということと、「親子が一緒に」に相互的な活動をする。第2は小、中学生の気になる行動、中学生の非行化は、そのときになっても遅い、乳幼児期から一貫した教育が必要だと思ったのです。

そこで「胎児から社会に育つまで」と一環した児童福祉活動を標榜しました。認可保育園になったときに児童館という名称はやめました。今でも大切な考えだと思っています。

ご承知のように次世代育成支援対策推進法ができ、今年の3月までに各自治体で児童家庭福祉の行動計画をつくることになりました。

私は北区と板橋区で「行動計画」に参画、北区では委員長、板橋区では副委員長として、区の児童福祉と家庭福祉はどうあるべきかを考えてきました。そこで児童館の見直しがでて、これから子育て支援センター化の話も出ました。乳幼児をもつ親子の居場所づくり、家庭の援助、親教育を期待するということでした。

私は児童館がコミュニティセンターとして保育園とともに、子育て支援のネットワークを張っていく、「胎児から社会に育つまで」を理念として、展開していくということを主張しました。

●子育て、子育て支援の展開

■子どもの居場所作り

次に子育て支援全体について少しお話をしたいと思っております。今は「子育て支援」ではなくて、「子育て・子育て支援」と言います。どうしてかということ、子どもの育ちのための活動と親としての育ち、母親が自己発揮する意味の両方を強調して、「子育て」をわざわざ入れてます。

この「子育て・子育て支援」の意味と實際を少し述べたいと思います。

■物理的な環境作り

まず物理的な環境作りが一つある。気持ちよく清潔に子どもが遊べる場所が必要です。実は、清潔っていうけれど児童館は結構汚いんです。皆さんがやっているところはきれいだと思いますけど、普通は汚い。子どもは活動的だからいろいろ汚します。「清潔」とは機動的にいろいろなおもちゃがあって、がちゃがちゃしているのがいいんですね。ただども、「汚い」という感じは安定してないですね。清潔感というのはとても大切です。それから年齢に見合った遊び方、玩具とか遊具とか絵本、それから親同士が話し合える場所が必要です。人と人が出会う場所だから、ソファとかテーブルとか、ちょっとお茶飲むところがあるといいですよ。それから子どもを世話する設備、オムツの交換とか、授乳のコーナーとか、こういうような環境、それから情報伝達掲示板なんかもありますね。

■ほっとする親子の居場所

精神的な居場所としての子育て支援センターを是非考えていただきたいと思います。

保育園時代に夕方から、お迎えの時間に週3回、喫茶コーナーをつくり、私がマスターになってコーヒーを入れる、主任がママ役でもてなしをする。そこでは楽しい、温かな雰囲気が出てコーヒーを飲みながら自然と子育て、家庭のことなどを話し、いろんな相談にも乗りました。

和やかな雰囲気はお母さんたちの心を開き、何でも話せる、主任に話を聞いてもらうためにくるということがありました。私はそのときに子育て支援は精神的につけているよろいを脱ぎ、くつろぎ、本音で話せる雰囲気は必要だと思いました。

何より保育者の必要、もてなす言葉、保育者同士の明るい声の掛け合いがあり、子どもの名前を覚え、名前を言って「よく来たね」、帰るときには「また来てね、待ってるからね」と声をかける。こういうことを繰り返して、親子にとってここが自分達の居場所として自覚するようになるわけです。

●保育者に求められる役割・資質

■親の理解と肯定的な見方

最後に保育者に求められる役割・資質ということについてです。一番目に親の理解と肯定的な見方だと思います。私はボランティアの育成をやってきました。そこには「年輪」を加えた人、結婚し、子どもを産み、病気になりとさまざまなことを経験しますよね。そういう経験全てが大切な専門性の

基礎となると思います。

しかしその上に親のうわべの行動、言葉で人を見て、批判してしまうのでなく、相手がなぜそういう行動をとるかという、その背景理解と同時に、できるだけその人のいいところを肯定的に見ることです。保育者は子どものいいところは見ようとするんですよ。しかし親に対しては、どうもそのようなゆとりがなく、「あのお母さんは」と批判したり、構えた形をとることになりやすいと感じています。

この前こういうことがありました。「みずべ」であるお母さんが子どもと離れて1人でお茶を飲んでいました。スタッフが「困るな、子どもをほったらかしにして」と思っていました。すると所長がそのお母さんのそばに行き「お母さん、毎日大変そうね」と言ったんです。すると「先生、私子どもと四六時中一緒に疲れてヘトヘトなんです。今こうやってお茶飲みながら子どもと離れている時って、心休まる一瞬なんです。ごめんなさい、子どもを向こうで遊ばせて」と言ったんです。「いいわよ、子どもを見ているからもうちょっとお茶飲んで、そしたら子ども見てね」と言いました。

この所長の言動はいいなと思いました。親理解って、一面だけ見ないでその背景をできるだけ見てあげる、それが専門性だと思うのです。

それから二番目に「完璧な親はいない」ということです。カナダの子育てテキストは「完璧な親はいない」という表題になっています。これは「親は学びながら親になる」、もう一つは「人間はみんな未熟である」ということです。だから時にはイライラして子ど

もを叱ることもある。夫と喧嘩することもある。みんな未熟だってことです。同時に私達、指導者、ボランティア、みんな未熟であるということです。未熟者同士がお互い支えあいながらやっていくと考えたらいいんですよね。ですから今「ファシリテーター」と言って「指導者」とは言わないですね。お母さんを指導していくのではなく、同じ未熟者同士が学びあっていくっていうもので、お母さんが学んで考えることで自分の問題に気づくことを手伝うということですね。

■コミュニケーションスキル

賀川先生は陽だまりのような人でした。目がしょぼしょぼして目が悪い。でもいつも温かな人を包む、オーラを発していました。春の陽光を浴びる感じで、陽だまりのような人だったんです。

ぜひ支援センターでも児童館でも指導者の人でも陽だまりのような人になって欲しいと思います。なんかその人の近くに寄っていきたくなる、なんかその人のそばにいると癒される、なんとなく元気になるとか、なんとなくこの人に心を開いて何でも話したくなる、そういう人になることだと思います。

これはとっても大事です。未熟な時って、私は自分育ちだと思っていますね。自分を見つめ直して、自分を発見して、自分を変えていく作業だと思いますね。いいリーダーとは人が寄ってくることです。「この人のためだったら何でもしよう」「この人だったら何でも話せるな」と思うような人だと思います。

それからつながり・つながる力はとても大事です。「コミュニケーションスキル」といいますかね。言葉と表情と仕草です。

まずは言葉についてですが、先に「名前を呼ぶことが大事」と言いました。そのあとに一言加えて、「久しぶり、待ってたわ」この一言が大事ですよ。「この前、風邪引いたけど大丈夫ですか」とか、「お子さんこの前、怪我したんだって大変だったわね」とか、こういう一言を加えたときに、手助けしていきたいな、勇気づけていきたいな、希望を持ってもらいたいなという気持ちになれば、言葉の中に出てくるんです。それをどういうふうに表現していくかだと思います。

それから表情。表情ってものを言いますよね。言葉が3割で表情が3割から4割って言います。笑顔だとしても楽しいですよ。ですからニコニコ笑顔で迎えてください。

それから仕草ということで、私たちは自分の意思を言葉、表情だけでなくしぐさで表したいと思います。

■カウンセリングマインド

カウンセリングマインドという言葉があります。「受容」「共感」「傾聴」「自己一致」「傾聴」がありますが、そのうち「傾聴」についてだけ述べます。「傾聴」とは「心を傾けて聴く」ということです。どうぞ聴き上手になってください。聴く事によってお母さんはいろんなことに気づいていきます。だんだん心を開いてきます。相談というのは日常の中から発生してくるわけですよ。「相談しよう」と向かい合ってる相談もあるけれども、相談は日常の中から生まれて

くるわけです。「傾聴」ということを大事にしてください。

●子育て支援のネットワーク

「江東区子育て総合センター」の図を見てください。子育て・子育て支援は地域全体です。ですから私達だけで全てを背負うとは考えないことです。私達には限界があります。私達が全て担うことはできません。児童相談所、保健所、教育委員会等との連携が必要になってきます。

添付した子育てネットワークの図は、江東区の行動計画をつくったときに提出した「江東区の子育て総合センター構想」の図です。子育て支援とは区の社会資源と連携しながらネットワークを作っていくわけですね。

これからはこの子育てネットワークをつくるのが大切ですね。ネットワークが機能するためには、「フォーマルな子育てネットワーク」だけでなく、それぞれの機関で働く人とのつながり、「インフォーマルな子育てネットワーク」が必要です。

一つずつのケースの中で「～さん」「～さん」との関係をつくっていくわけです。これでネットワークの基盤ができていきます。相談者が紹介保険所に相談してくださいと言われ、保健所に行くと言われ、保健所がまた「これは福祉だからそちらへ行ってください」と、たらいまわしにするというケースが多くあります。そのときは「保健所の～さんを訪ねてください」と固有名詞で紹介する必要があると思います。

●みずべ スタッフの心得 12か条

最後に、みずべのスタッフの12か条について述べます。これは私達のスタッフ心得なのですが、みなさんもぜひ12か条ではなくてもいいですから心得をつくっていただきたいと思います。〈命の誕生を祝福〉 〈子どもの最善の利益を図る〉 〈ふれあう心を土台にし〉 は、子ども達と心の絆をつくっていく。フランス語で「ラポール」って言いますよね。心の輪をつくっていく。だから支援センターでも学童でも児童館でも心の輪をつくっていく。

次に〈安心・信頼の場〉は、今専門性が何だかんだ言う前に、安心と信頼を得るかどうかだと思います。指導者に安心して話すとか信頼するとか、ここが安心の場だとか、信頼のおける場だと思えるところということです。それから〈肯定的なまなざし・冷静な判断〉〈学び・支え合う〉〈喜び、悲しみの共有〉〈支え合い、助け合い〉と続いて〈秘密保持の原則〉、秘密保持は今では特に大事な原則になりますね。いろいろな相談を受けたときに決して他にもらさない。〈お母さんの自己発揮〉とは、お母さん達が持っているエンパワーがありますよね。力をどう発揮させていくかです。最後に〈地域の輪のなか〉は、できるだけ地域全体の中で子ども・親を捉え直してということです。

それでは時間になりましたので終わりにします。ご清聴ありがとうございました。

新澤 誠治(しんざわ・せいじ)さん プロフィール

1935年 東京都江東区の下町に生まれる。
1955年 下町の底辺地帯でボランティア活動をする。
1958年 神愛保育園園長として就任。
1999年4月より「江東区子ども家庭支援センターみずべ・所長」として就任。

前全国私立保育園連盟の研修部長・全国私立保育園連盟の副会長
前江東区公私立保育園会長・東京私立保育園連盟会長
前全国国際交流委員長・経営強化委員長 保育カウンセリング企画委員長
前 OMEP(世界幼児教育機構)理事
前日本子ども NPO センター代表

現職、現在の役職
東京都家政大学教授(児童学科 育児支援専攻)
みどりヶ丘幼稚園園長
江東区子ども家庭支援センター スーパーバイザー

著作
「障害児保育の現場から」フレーベル館 編著
「ふれあい育む障害児保育」小学館 共著
「私の園は子育てセンター」小学館(日本保育学会文献賞受賞)
「保育原理」樹村房 共著
「家庭と連携と子育て支援」共著 ミネルヴァ書房
「子育て支援 はじめの一步」小学館
「環境プランニングブック」・ 共著 チャイルド社
「21世紀の子育て支援・家庭支援」フレーベル館 共著

講演の記録

ワーカーズコープ研修会

日付：2005年9月3日(土)

会場：板橋区立グリーンホール

主催：労協センター事業団